

# 2018 シンポジウム報告

## 報告

### 第26回 公開シンポジウム「移民と人権」

日時：2018年6月30日（土）14:00-17:30

場所：東京大学駒場Iキャンパス 18号館ホール

#### 報告：

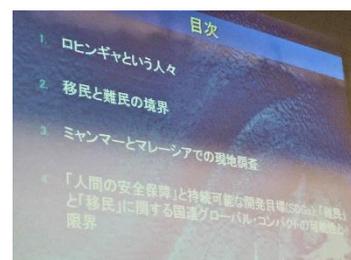
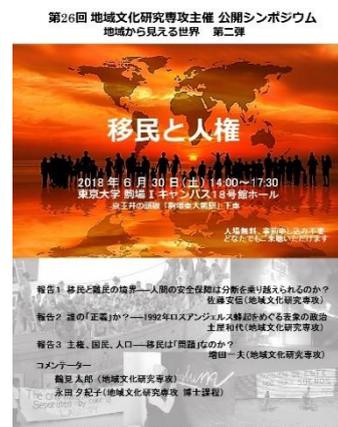
1. 移民と難民の境界——人間の安全保障は分断を乗り越えられるか？  
佐藤安信（地域文化研究専攻）
2. 誰の正義か？——1992年ロスアンゼルス蜂起をめぐる表象の政治  
土屋和代（地域文化研究専攻）
3. 主権、国民、人口——移民は「問題」なのか？  
増田一夫（地域文化研究専攻）

司会 長谷川まゆ帆

世界はいまグローバル社会に向かう急速な流れのなかにあつて、移民や難民の悲痛な叫びにあふれています。シリア難民、ロヒンギャ難民など移民や難民の深刻な状況が伝えられる一方で、欧州連合からのイギリスの離脱、トランプ政権による移民排斥の顕著な動きがあり、難民の受け入れへの不満や移民への排斥感情は日に日に高まっています。恐怖と欠乏から逃れようとして移動する人々、不当な差別や迫害に苦しむ人々を救うためにいま、わたしたちは「人権」や「正義」とどのように向かい合えばよいのでしょうか。

このような問いかけから、今年の専攻シンポジウムでは、昨年のテーマ「地域から見える世界」に次ぐ第二弾として、「移民と人権」をテーマとしてかかげました。それによってこの混沌とした同時代の世界を理解するのに役立つ地域横断的・学際的な視点を共有し、議論し、現実に立ち向かう知を模索することをめざしました。

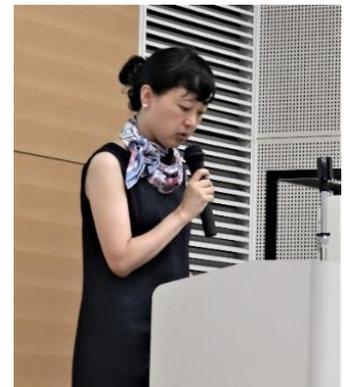
シンポジウムでは、最初に専攻長木宮正史からの代表挨拶があり、ご自身の韓国政治外交史研究の長い研鑽を背景にした本テーマに寄せる熱い期待が示されました。次に、司会を務める長谷川まゆ帆から本シンポジウムのねらいと意義、テーマ設定に関する趣旨説明があり、続いて第一部として、アジア、アメリカ、フランスに関わる三つの基調報告がなされました。



佐藤安信は、最初に、多くのミャンマー人から「ベンガル不法移民」と呼ばれる「ロヒンギャ難民」とはだれか、移民と難民の境界がどこにあるのかを説明し、移民を生み出す経済格差や脆弱なガバナンス、難民認定制度のパラドクスなどの構造的問題に触れ、その上で、難民の立場に立つ国連の難民包括フレームワークやニューヨーク宣言（2016年）、グローバルコンパクトの起草（2018年）の重要性を指摘しました。さらに難民救済の方策として、人間の安全保障、SDGs、「ビジネスと人権」といった指導原則を背景としつつ、主権国家体制を超える新たなパラダイム、すなわち企業やビジネスの非国家主体の側から移民や難民を巻き込んだ持続的な開発に乗り出すこと、国境による分断を克服するグローバルなネットワーク、ガバナンスの構築の必要性を結論として示しました。現実のなかで試行錯誤しながら積み上げられてきた経験に基づくリアリティのある報告でした。



土屋和代は、最初に、二極化するアメリカ社会の排外主義、人種主義の高まりとN・フレイザーの「通訳不可能性」という言葉に言及し、1992年に起きたロスアンジェルス蜂起、すなわち韓国系商店に甚大な被害をもたらし、ラティーノ住民を含んで展開した「アメリカ史上初の」と言われる多人種/民族暴動をとりあげ、この事件についてのアーカイヴを踏まえた研究史の不在と暴動を語ることの困難さを示しました。そして最後に、この出来事をオーラル・ヒストリーとして「当事者」のこぼれを通して描くアナ・ディーバー・スミスの戯曲『薄明りーロスアンジェルス、1992』を紹介し、多数の当事者の声をスミス一人の語る声として舞台上に再現しそれによって人々の内面を描き、事件の向こうにある「人」を浮かび上がらせる試みを紹介しました。オーラル・ヒストリーと戯曲、史実と表象の間に介在する歴史家の存在とその役割について、多くの示唆を与える報告でした。



増田一夫はまず、日本では、年間の難民受け入れ数が極端に低く、外国人や移民を「在留外国人」と呼び、厳しい国籍取得システムが維持されていることを指摘しました。その上で、少子高齢化に伴う人口問題を国内にいるネイティブだけで解決しようとする日本政府の立場は「人口主権」((F. エラン)と呼びうるものであるが、ヨーロッパから見ると「純粋なエスニシティという神話に結び付いた」思想であると論じました。その上で、真の「内なるグローバル化」をめざすならば、移民を市民としその人権を守る立場から「人口主権」を放棄することが必要だと言及しました。調査結果からは、難民の受け入れ数の少ない地域ほど難民への暴力が多発していることが示され、また、エスニック・ネーションのイデオロギーは「自己免疫」(J. デリダ)を起こしていないか、人文、社会科学の使命は、移民との共生を模索し、「統治のテクノロジー」(M. フーコー)のイノベーションを訴えることではないか、といった問いかけもなされました。日本の移民問題が浮き彫りにされる報告でした。



第二部では、研究対象地域を様々にする2名のコメンテーターから、基調報告についてのコメントや質問が提出され、フロアからの質問も交えて活発な議論がなされました。コメンテーターの一人である博士課程の現役院生永田夕紀子からは、土屋報告のアナ・ディーバー・スミスの戯曲のもつ対話可能性に深い共感が示され、またご自身のメキシコからの高い教育を受けた人々に関する移民研究の立場から、移民のダイバーシティを考える場合のデメリットについての質問がなされました。増田報告に対しては、移民を統合するいうときに「統合」とは何をさしているのか、佐藤報告に対しては、現地調査をする際の留意点は何か、グローバル・ガバナンスがトップダウンなのかボトムアップなのかといった質問がなされました。

もう一人のコメンテーターである専攻の教員鶴見太郎からは、人権を守ることは途方に暮れる人々に命綱を渡すという局所的な保護と、その後の長期的な保護との両方があり、三報告のめざしていたものはそのうち後者に関わっていたとの指摘がなされました。またロシア帝国の移民であるユダヤ人がポグロムの怖れを抱きながら生きる難民でもあったことから、難民と移民の境界が曖昧であったこと、同時にマイノリティの苦境にも触れ、マイノリティの側でも抑圧者と被抑圧者の境界が揺れ動くこと、移民はいないとする日本政府の場合、移民への教育的配慮が不足している危険、移民内部のDVによる人権侵害、子どもへの人権侵害にも目を向ける必要があると指摘しました。加えて、移民受入についてマクロなメリット(労働力増強)は語られても、ミクロな次元ではデメリットばかりが語られがちなので、それを覆す具体的な研究をさらに提示していくことが必要であること、また、関連して、土屋報告において、蜂起から平和を取り戻す際に何がそれを促したのか等々さまざまな問いが示されました。

昨年に引き続き本シンポジウムでも、2015年に発足した院生フォーラムと連携してコメンテーターの選出や事前準備を行いました。今後もフォーラムとの連携を深めながら、前期課程学生・後期課程学生・一般の方々の参加もいただけるシンポジウムをめざしていきます。

### 《シンポジウムに出席した在籍学生のリアクション・ペーパーより》

三人の先生方のご報告、鶴見先生、永田先生のコメント、大変興味深く勉強させていただきました。特におもしろかったのは以下の点です。まず増田先生のご報告で日本では国際基準では「移民」とされる集団が一定数いるのに「移民」概念が抹消されているというご指摘。日本における「移民」の人権問題を考えるとき、まずは草の根で「移民」概念の再検討も必要ではないかと感じました。また鶴見先生のコメントで、権力的な人権の問題、つまり社会の様々な状況に埋め込まれた個人の多様性どう考えるかとまとめてくださった視点。地域と分野の様々な角度が今回「移民と人権」を考えることを通して、本来グローバルな範囲で様々な次元での対話を通じて考えなければならない「移民と人権」という大きなテーマを設定する重要性を感じました。前回に引き続き「地域から見える世界」というサブタイトルの意味を考えさせられるシンポジウムでした。



直近のヨーロッパやアメリカでの移民に関する様々な動きがあるなかで、このようなシンポジウムが開催されたことは大変意義があると思いました。三人の先生方の発表を伺って、移民の“invisibility”（不可視性）という言葉が浮かびました。見ているはずでみていない、いるはずなのにいない、そうした傾向がどこの国でもあるのではないかと思います。「移民」という言葉が正式文書で見あたらない日本の現状や、国を追われて地中海を漂流する人々がいる所とは離れた場所です。28 人のヨーロッパ代表者によって採択された一時的な「危機」を逃れるための合意が物語っているのは、そうした当事者の“invisibility”ではないかと思いました。

修士課程 1 年 白尾安紗美

今回の大きなテーマは、「移民」そして「難民」でしたが、「移民」という言葉の曖昧さを初めて実感し、とても新鮮な気持ちで 3 人の先生の報告を拝聴しました。佐藤安信先生のご報告では、移民は「移動によって生活の根拠を移す人々」と定義され、また移民・難民とともに国境を超えた移動を必ずしも伴うわけではなく、国内の移動でも同様の意味を持ち得ることが指摘されていました。この点については、私自身の研究関心でもある「先住民」がどのように関わってくるかが気になりました。一般的に国外に共通の祖国を持つとされる「移民」(≒ethnic group) は、「先住民」とは同じマイノリティ (≒national minority) ではあるものの区別して語られる必要があると指摘する論稿をつい最近読んだのですが、国内の移動（あるいは displacement）を経験している北米地域の先住民には「移民」とも捉えられるような側面もあるのではないかと考えるようになりました。また統合を目指す「移民」や「難民」が求める人権・権利と、固有の独立した集団としての立場の維持を目指す「先住民」の求めるそれへのあたり・結びつきにも考えが及び、今後もう少し深く考えてみたいと思いました。

また土屋和代先生のご報告で着目されていた「当事者の声を見過ごすことで零れ落ちてしまう視点」という着眼点にも、大変感銘を受けました。1992 年当時のメディアを中心に作り上げられる特定の言説、表象に埋もれた当事者一人一人にとってのロスアンジェルス蜂起を紐解く作業を追うことは単純にとっても楽しく、また自分自身の研究においても大切にしたい視点だと感じました。

修士課程 1 年 中山絵里加

佐藤、増田両先生の発表は、現代の移民意識・概念・実態についてであったが、問題系におけるマクロな構造的な問題点・論点が整理されていたと思う。脱国境かつ移動が顕在化している現代において「異なる」人々が協業から共生へと、ナショナルでなく理念統合にもとづいて（そしてそれが一層 SNS などにもとづく脱国境的グループの注目をもたらしていると考えられる）社会を運営する際、新しい膜然とした境界は既存の権力構造とどう関係するか興味を湧かした。

ロスアンジェルス蜂起についての土屋先生の発表には、都市・多文化市民の問題が自分自身のテーマと似ていることもあり何より興味を惹かれた。都市内において先鋭化しがちなマイノリティの問題が、ドキュメンタリーにおいて多層的視点・グループの問題として解きほぐされ、関係者の解釈の地平の一つとなっていたことが示されていた。個人的興味として少し気になったのは、(韓国系として話題にのぼったが) アジア系移民への差別がもう少し取り上げられていると嬉しかった。

増田先生の統合が両義的であるという意見は全くその通りだと思った。日本における言説も移民を避けるように構築されていることも名称的・言説内容的に示されていたと思う。

修士課程1年 森 達彦

1つ目の発表を通して、「難民」としての現象が存在しているも「法」的にその存在に対する対応が漂流する可能性があることを知ることができました。人権の問題も制度としてアプローチせざるを得ないものであり、そのため様々なアクターが参加し、より広い人権を扱えるようになることに意味があると思えるようになりました。

2つ目の発表では92年のLA蜂起というテーマを含め、普段はあまり接することのない研究方法による報告が聞けて大変印象に残りました。

3つ目の発表は私自身が「移民」に関する概念を考え直すことができたという面で、大変興味深い報告でした。私自身が留学生として日本に在留しているも「移民」(者)という自覚がなかった分、当報告における「移民」の定義を見て、「移民」が思った以上に「身近な」概念であることに気づき、目から鱗が落ちたようでした。また、母国である韓国においても日本の「移民」感覚(=身近なものではない、ある意味狭い意味としての「移民」に拘っている)が同様に存在しているのではないかと改めて考えてみる機会にもなりました。

修士課程1年 チュ・ミンギョン

西洋古代史を専門とする私は、現代世界を論じる個々の報告に対し、的確なコメントをする能力を持たない。しかし今日のシンポジウムを拝聴し、「刺激的であった。難民に対する意識が高まった」という感想を持ったことは確かである。全く専門の異なる私がこのような感銘を受けたのは、やはり私も今日を生きる「同時代人」であるためであろう。

「同時代人」と言えば、私が研究するローマ帝政期の歴史家タキトゥスも『同時代史』と訳せる歴史書を書き記している。ここで彼が特に声高に叫んでいるのは(同書の後半部分が散逸しているため推測の域を出ないものの)彼が生きたフラウイウス朝の第三代皇帝ドミティアヌスの治世がいかにひどいものであったか、ということにあったと思われる(タキトゥスの『アグリコラ』という作品は、彼の反ドミティアヌスの姿勢を明確に伝えている)。しかし、ドミティアヌス帝とは縁もゆかりもない私にとって、彼の『同時代史』は単なる有用な史料にすぎない。

本日登壇された3名の先生方は、程度の差こそあれ、タキトゥス同様、自分たちが生きる時代が(難民という観点から見れば)いかにひどいものであるかを糾弾されているように感じた。報告の根底に義憤があるように思われる。普段、いわば「赤の他人」として気楽にタキトゥスを読む私にとって、「同時代人」として突き付けられる歴史はやや重い。自らの学問に対する意識の低さに恥じ入るとともに、あくまで中立の立場で学問ができることに胸をなでおろす思いである。

博士課程1年 逸見祐太